

NPO法人リスタ 定期セミナー

横山泰行先生 講演 「ドラえもんに学ぶ 子どもの意欲が上がる関わり方」



日時： 2011年 11月19日(土) 14:00~16:00

会場： 中央大学駿河台記念館 670号室

対象： 保護者・教育関係者

主催： NPO法人 次世代育成フォーラム・リスタ

協力： ㈱市進総合研究所 ジャパンライム株式会社

第一部 基調講演 「ドラえもんに学ぶ 子供の意欲が上がる関わり方」

<講師>

横山泰行 氏 (教育学博士 富山大学教育学部名誉教授)

第二部 パネルディスカッション 「子どもの意欲が上がる時とは」

<パネリスト> 50音順

荻上廣美 氏 (宝仙学園 理数インター父母会役員)

川崎知己 氏 (杉並区立 荻窪小学校校長 / 元三鷹市教育委員会 教育施策担当課長)

福嶋 史 氏 (NPO法人 Learning for All)

前嶋正秀 氏 (かえつ有明高等学校・中学校 教務主任)

横山泰行 氏 (教育学博士 富山大学教育学部名誉教授)

<モデレーター>

次世代育成フォーラム・リスタ



11月19日 中央大学駿河台記念館にて、
子どもの学習意欲をテーマにしたセミナーを開催しました。

今回、講師としてお招きしたのはコーチングの観点から「ドラえもん学」を提唱している富山大学教育学部名誉教授の横山泰行先生です。

第一部基調講演では「ドラえもんに学ぶ子どもの意欲が上がる関わり方」についてお話をいただきました。



「のび太という少年を、一人前の少年に育て上げたドラえもんの関わり方は、まさに主体性を育むコーチングそのものです。」と横山先生。

実際にドラえもんの短編からエピソードを採り上げ、コーチングに必要な「ほめる力」「叱る力」「気づかせる力」「行動させる力」「学ばせる力」について詳しく解説していただきました。



ドラえもんは、のび太の目標を明確にし、望ましい結果を得るために「何を学ばせ」、「どんな行動を起こさせればいいのか」を対話によって積極的に引き出していきます。のび太に対するドラえもんの言動や行動は、教育現場においても活用が可能で、特に子どもの長所を引き出す際に有効とされています。



横山先生の基調講演を受けて第二部では、「子どもの学習意欲が上がるときとは」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

実際に教育現場に携わる様々な立場の方から、豊富な経験をもとにお話をいただきました。



「できないとすぐ決めつけず、その子をよく観察すること。そこから問題を見極め、教える側が根気よく向き合うことが、良い結果に繋がっていきます。」

NPO 法人 Learning for All

福島 史さん



「ネガティブな言葉、自己否定の発想を消すことは重要。結果よりそれまでの努力と一緒に喜び、認めることで子どものやる気は必ず上がります。」

かえつ有明高等学校・中学校 教務主任

前嶋 正秀さん



「その子の頑張りのプロセスを見つめ、全体評価ではなく、1つひとつの事象を具体的に採り上げほめること。そして何より子どもを認め、その子独自の長所を引き出すことが大切です。」

杉並区立 荻窪小学校校長

元三鷹市教育委員会 教育施策担当課長

川崎 知己さん



「親は子どもの身近な手本。親自身がモチベーションを高く保ち、まずは子どもの話をよく聴くことで子どものやる気は上がります。」

宝仙学園理数インター父母会役員

荻上 廣美さん



「夢は持つことよりも、持ち続けることのほうが大切。そのためには、子どもにあれこれ言う前に、大人自身が夢を持ち続けること。ドラえもののストーリーはそんな私たち大人に対しても夢を持ち続けることの大切さを教えてくれる作品です。」

横山 泰行先生

1. きれいなテストにガ〜ンバ! (ドラえもんプラス第1巻22話) より

ドラえもんのコーチとしての成果は、のび太の「黒い心」にまどわされずに、「白い心」を引き出そうとしたこと。そのことが、のび太の潜在能力を十分に発揮させ、ドラえもんのミッションを達成できた要因である。

2. おばあちゃんの思い出 (短編第4巻第18話) より

のび太はおばあちゃんと過ごした日々を振り返った時、改めて未来に向かって突き進むことのできるエネルギー (モチベーション) を手に入れることができた。人はモチベーションがないと、行動を起こせない。のび太のおばあちゃんがのび太を無条件に褒めたように、親や教師の肯定的な承認は、子どもを勇気づけ、行動を起こし、そしてその言葉はいつまでも子どもの心の中に生き続ける。モチベーションは行動を起こす源である。

3. ひみつ道具「タイムテレビ」による観察

ドラえもんはのび太に目標を持たせ、その結果が実際にどのようなようになるかをイメージさせるためにタイムテレビを使って未来をみせている。子どもに目標を持たせるには、その先の将来をテレビのように映像化することが大切。子どもがなかなかイメージできない「漠然とした目標」を映像化によって「明確な指針」に変えていくのが親や教師の役割である。

4. ラポールの構築

ラポールとは心理学で親密な信頼関係を意味する。このエピソードではドラえもんのひみつ道具「コンピューターペンシル」が登場し、道具の力によって100点をとる機会が与えられる。しかし、のび太はそんなテストで一生に一度の100点を獲得の機会があったにもかかわらず、結局、コンピューターペンシルを使わずに、普通の鉛筆でテストに臨んだ。これはドラえもんの、のび太を信じる心に、のび太が報いた場面である。人の心の奥に潜む欲は、自分で気づいてこそ成長へのチャンスとなる。この「気づかせる力」は先生と生徒の信頼関係にも当てはまる。

5. 自立と依存

ドラえもんはのび太が目標に向かって着実に前進できるように「ほめる力」と「叱る力」をうまく使い分け、のび太の主体性を引き出している。「ほめる」とは肯定的な承認であり、相手を認めることである。また、「叱る」とは、相手が目標を見失いそうになった際に軌道修正する手段である。そしてそこには相手に愛情があることが大前提であり、叱るべき対象の「行為」を叱ることがあっても、本人の人格を否定するものであってはならない。

6. 状況の把握と対応の名伯楽ドラえもん

ドラえもんは「学ばせる力」を駆使しながら、のび太にたくさんの成功と失敗の機会を「経験」させている。親や教師は子どもに経験をさせることに目がいきがちだが、良くも悪くも経験から何を学んだかを考えさせる振り返りの機会を共有することが大切である。